

「よかれと思ってやったのに」 清田孝之著

晶文社 9784794970954 本体 1400 円 (税込 1540 円)

雪が融けるころになると参考書の箱を開けて売場に出しながら、十八歳のころと同じ作業をしていることに気づく。やりたいことがみつからなくて何となく高卒で書店に就職し、そのままずると六十六歳になった今も書店員をやっている。本が好きすぎて仕事中にも本をパラパラめくっていらは怒られていたので、本屋には向いてないと思っていたが、この年まで現場にいるので、今では天職だともいわれるようになった。この連載では私がいま気になっている本をおすすめしていききたい。

春は出会いの季節でもあるので最初の一冊は「よかれと思ってやったのに」を選んだ。女性たちの恋バナ収集という活動を行っていた清田孝之さんが、女性たちの失恋話などを聞いていて気付いた男性たちの傾向をまとめたものだ。女性にとっては「わかる!」、そして男性にとっては「え、それが問題なの?」という指摘がびっしりである。

バスタオルやTシャツの置き場所を覚ええない。愚痴を聞いてもらおうと思ったら解決策を提案された、思い通りにならないとすぐ不機嫌になる。など個々には小さいことであっても、そのうち爆発に至るトラブルの元になるような事例がたっぷり紹介されている。

この本のすごいところは、そういう小さい話から解き明かして今の日本の職場や家庭での大きな問題に気づかせることだ。私はいまの日本に息苦しさを感じていて、その原因として「さまざまな組織の意思決定の場に、中高年の男性だけしかない」問題があると思っているのだが、そうではない社会、女性の意見が尊重され、セクハラもパワハラもない日本に変わっていくためのヒントがつまっていると思う。

これは令和版の人間関係のための教科書なのだ。恋愛を始めている人、家族を始める人、就職する人、部下を持つ人、などこれから男と女のいる社会に出ていくすべての人におすすめする。

【叱る依存】が止まらない」村中直人著

紀伊國屋書店 9784314011884

本体 1600 円 (税込 1760 円)

今年前半の。パワーワードは『叱る依存』に決まった。この本には叱られる人ではなくて、実は叱る人の方に問題があつて、それは「叱る」という正しい行為への快感から逃れられない依存症かもしれないと書いてある。著者は公認心理士で脳科学のオタクでもあるよ。うだが、発達障害の当事者・家族・支援者たちのサポートをしている人だ。

驚くような結論だが、科学の裏付けに基づきながら慎重に議論を進めていて、納得させられてしまう。この「正しい結論」を日本の社会で受け入れてもらうのはとても難しいことだと思うが、だからこそ、今、とても必要なものだと思う。

昭和の親たちには「しつけ」のためには体罰も当然という風潮があつた。その後は「体罰はいけなさが適切に叱るのは良い」とか、「感情的に怒つてはいけなさが叱るのは必要」などと言われてきたのだが、著者は叱ること自体を問題にしている。

ちなみにこの本では「叱る」という言葉を「言葉を通じてネガティブな感情体験（恐怖、不安、苦痛、悲しみなど）を与えることで、相手の行動や認識の変化を引き起こし、思うようにコントロールしようとする行為」と定義している。ポイントは、「叱る人が叱られる人より上位にある」とことと「ネガティブな感情を与える」ということだ。涙を

浮かべて「ゴメンナサイ」と反省の意を示したら、叱った効果があったような気になるが、それで本人の行動が変わるとはかぎらない。

ネガティブな感情は一時的には効果があるが、長期的には行動の変化につながらないため、ますますきつく叱るようになる。叱る行為は「処罰感情を充足する」ことから叱る側に快感をもたらす。叱ることが必要な理由は「叱られる方」ではなく「叱る方」にあったということだ。そして叱る快感をもとめてどんどんエスカレートしてしまい、ついには「お前のためにやっているのだ」といいながら「虐待・DV・ハラスメント」につながることもある。

私は二〇年前からボランテニアで発達障害の当事者の相談を聞いているが、当事者には転職を繰り返している人が多い。発達障害によるうっかりミス（注意欠陥）で仕事を続けられなくなることで、「失敗によって叱られること」に耐えられなくて仕事を辞める人がずっと多い。当事者は子どもころからずっと叱られ続けているので、新しい職場で一つ叱られるだけで「過去に叱られてきたことのすべて」が頭によみがえって、耐えられなくなるのだ。私も著者の結論に全面的に同意する。

著者からは「叱ることがいけないとしても、叱る人を叱ってもいけない」ともある。この本によって、自分の中の「叱る依存」に気が付く人が増えれば、この社会ももうすこし暮らしやすくなるだろう。一人では暮らしていけないすべての人におすすめる。

「箱館戦争と碧血碑 碧玉の志士たちの百五十回忌」 木村裕俊著 函館碧血会
発行

「復刻版 碧血碑物語」 木村裕俊編・著 函館碧血会発行

ウクライナの戦場の報道を見ていて、明治二年の今ごろには函館の街にも戦死者の遺体が放置されていたという歴史を思い出した。箱館戦争で新政府軍の戦死者は招魂社（今の護国神社）に祀られたが、榎本武揚率いる幕府脱走軍の方は降服して全員収監されたので戦死者を弔うものはいなかった。そこで見るに見かねて遺体を回収し埋葬したのが、狭客の柳川熊吉と大工の棟梁の大岡助右衛門（おおおかすけえもん）、協力したのが実行寺の日隆（にちりゆう）上人だったという。谷地頭には賊軍とされた側の慰霊碑である碧血碑と、その近くに柳川熊吉の顕彰の碑も立っていて義挙を今に伝えている。

この話は長谷川伸の原作で広沢虎造の浪曲「函館碧血碑」となって全国に広まった。史実と違うという批判もあったが、街にただよう死臭から話が始まるようなりアルなところもあった。この浪曲は一部分だけが国際日本文化研究センターがインターネットに公開していて聞くことができる。

柳川熊吉は今も有名だが、相棒の大岡助右衛門について知る人は少ない。大岡は横浜生まれの大工の棟梁で、今でいえば公共工事を施工するプロジェクトリーダーだった。二三歳の若さで函館奉行所の木造工事の責任者をつとめ、後に札幌に行つて開拓使の発注する豊平館や時計台（推定）、琴似屯田兵屋などさまざまな工事の責任者となった。当時の札幌の工事の大半を大岡が落札して請け負ったというから、大工事を仕切る実力があつたのだろう。剛腹で義侠に富み、よく部下を愛し私財を恵んで惜しまなかったというが、ぼくちが好きで豊平川の河川敷で百叩き刑に処せられたこともあつた。函館では十歳上のぼくち打ちの親分の柳川熊吉となぜかうマがあつたらしく、それで賊軍の遺体回収という当時としては危険な行為が一緒にできたのだろう。

私はわりと大きい本屋に勤めているので、「ここならどんな本でも見つかりそう」などとよく言われるのだが、こういう話になると新刊本屋では限界がある。函館碧血会前事務局長木村裕俊さんの自費出版の「箱館戦争と碧血碑」や「碧血碑物語」は今でも入手可能だ。もっと詳しく知りたければ函館市立中央図書館の二階で相談すると柳川熊吉については『函館蕎麦史』、大岡助右衛門については『風雪の百年 北海道建設業界史』という本が出てくる。かなり昔に業界団体が出した本だが図書館や古書店ではみつかる。大岡の写真は発見されていないが、大岡が中心となって建てた札幌・豊平の日蓮宗の経王寺には開基檀家総代としての肖像画が伝わっている。この肖像画は私が会員として編集

する函館碧血会のホームページで発表しただけで、一般には知られてないと思うのでこの機会に公開する。

大岡は札幌の大地主でもあったが、跡取り息子を豊平橋の工事中の事故で亡くし、文字が読めなかったため会社を部下にだまし取られ、好きならばくちで散財して晩年は経王寺でひっそりと暮らした。明治三十五年に六六歳で没し、墓も経王寺にある。

碧血碑の碑前慰霊祭は例年六月二十五日に行っている。過去二年はコロナ禍のため、役員のみでひっそりと行ったが、今年の本州からの参加者や一般会員もふくめて通常どおり午後二時から行うことになった。東京から浪曲師の東家一太郎さんも来函され、柳川熊吉が主人公の虎造とは別バージョンの浪曲を碑前で奉納する予定である。

小田嶋隆のコラム道

ミシマ社

コラムニストの小田嶋隆さんが六月二十四日に亡くなった。六十五歳ということはおそらく一つ下でほぼ同世代である。

小田嶋さんはいろいろな雑誌やネット媒体に書いていてコラムの達人と目されていた。私は単行本を全部買うほどの熱心な読者ではなかったがネット版「日経ビジネス」の「ア・ピース・オブ・警句」は毎回楽しみに読んでいたし、ツイッターもフォローしていた。私が小田嶋さんに注目したのは一九八〇年代後半に雑誌「Bug News」で連載を読んでからだ。中古で買ったPC98シリーズのパソコンに20メガバイトのハードディスクをつないで、パソコン通信でメールや掲示板をはじめたころだったが小田嶋さんは誰とも違う切り口でハッカーやマイコンオタクの世界を描き、それは「わが心はICにあらず」という本（品切）にまとまった。ほかにコラムをまとめたものは何冊もあり、ツイッターの発言を編集したものが「災間の唄（サイゾー刊）」として出ている。また、アルコール依存症から抜け出した経験を「上を向いてアルコール（ミシマ社刊）」に書いている。

毎日新聞の死亡記事によれば「政治や社会を反権力の立場から鋭く批評した」ということだが、小田嶋さんは反権力というより「非権力」の人で左右の真ん中くらいの立ち位置の人だったと思う。言論人の全体が右傾化したために、「権力とは一線を画す」という程度で反権力と言われるようになるのだから小田嶋さんには気の毒なことだった。小田嶋さんのユニークなところは徹底した言葉遊びを行うことで、それは前の世代の作家の井上ひさしなどに通じるものがある。お正月に「ア・ピース・オブ・警句」に発表されていた「吉例いろは歌留多」などは、その一つだ。今でも読める二〇二二年版に

【や】病は子から

【む】無理が通れば橋下徹

【も】森友三年加計八年

などとあるのは見事である。ツイッターでは毎日のニュースに「寸鉄人を刺す」コメントをつけていて現代の落首の趣があった。こういうリアルタイムの文章の芸がもう読めなくなっただけのとはとても残念だ。

小田嶋さんがコラムの書き方を指南した「小田嶋隆のコラム道（ミシマ社刊）」という本があり、この原稿を書くために読み直したら、赤鉛筆で線を引きたくなる箇所ばかりだった。

（以下引用）

「文章の書き方」は、簡単に明示できるものではない。

というのも、「文章の書き方」は、「ものの考え方」や「人生の生き方」を含んだ壮大なテーマで、それゆえ、他人に教えられるようなものではないからだ。

というよりも真に致命的な事柄は、他人から学ぶことができない。当然だ。

(引用終わり)

とか、あるいは

(以下引用)

つまり、コラムは新聞社という「社会の木鐸(ぼくたく)」に起源を発するパブリックな言論とは正反対の出自を持つもので、コラムニストと呼ばれる個人が、私的かつ独自の視点において吐き出した言説であり、ときには偏見を含んでいるかもしれない、「別枠」の弁なのである。(中略)

が、読み手の側がどう読むのかは措(お)いて、コラムニストは自分が「規格外」の存在だという気分をどこかで持ちこたえておくべきなのだ。

(引用終わり)

など、たしかに私は新聞社としては規格外だから注文が来たのだなど納得。さらに

(引用はじめ)

文章は、失敗が許される分野だ。どんな手ひどい失敗をしたところで、ダメなコラムで人が死ぬわけではない。会社の業績にアナがアクわけでもない。とすれば、コラムニストは、ビジネスマンよりもずっと失敗に対して大胆であらねばならない。そういうことだ。

(引用終わり)

などという言葉に救われたりする。もともとは「最近の函館関連本」というテーマで書くつもりだったのだが、いつの間にか小田嶋さんの話になってしまっていた。書くモチベーションが大事とオダジマ先生も言っている。
ではまた来月。

書名…家族と国家は共謀する

著者…信田さよ子

角川新書 990円（税込）

ISBN:978-4-04-082103-0

私と同世代の安倍さんが暗殺された事件と、その容疑者が統一教会の信者の二世だったという報道に衝撃を受けている。一九七三年、私が高校三年の時に、苫小牧の街角に「世界基督教統一神霊協会」のポスターが張り出してあり、町内会館で説明会があった。好奇心で見に行ったところ、教義を説いたポスターやパンフレット・出版物が置いてあったが、出口の近くに「勝共連合」の出版物があったので、これは普通のキリスト教会ではないということに気づいて退出した。「あなた左翼なの？」「わからないけど反共ではないです」「こんど話を聞かせてよ。そういう人の話も聞いてみたいわ」などと信者とのんびりと会話したのを覚えている。当時はまだ普通の新興宗教として布教活動をやっていった。その後、統一教会は霊感商法や合同結婚式で話題になったし、若い信者の「おつまみ売り」に会った事もある。最近話題を聞かなくなったのは違法な活動をやめたからではなく政治家に接近したからだという報道も驚きだった。その活動について「統一教会」という研究書が北海道大学図書刊行会より出版されている。（櫻井義秀・

中西尋子著

韓国系宗教の統一教会と韓国嫌いの右派が一緒に活動できるのかはなぜなのか、私も謎だったが、ベストセラーになった「日本会議の研究」の著者の菅野完さんがSNSで解説していた。つまり日本の主流にいるオジサンたちが持っている『女子供は黙ってろ』という感情を中心になるとみんなが共闘できるのだそうだ。嫌いという感情は強い。それで「生意気な女は嫌い」という人たちの大連合ができて、今どきの「保守」勢力となつたらしい。安倍元首相は、それらの人々の支持を得て、性教育やジェンダー平等、夫婦別姓などに反対してきた。世界経済フォーラムが七月十三日に発表した「ジェンダーギャップ指数二〇二二」で日本が一一六位という驚異的な順位になったのも、安倍元首相らの長年にわたる地道な活動があつたことだ。

今回紹介する『家族と国家は共謀する』の著者、信田さよ子さんは四十年にわたって家族問題で悩む人の相談を続けてきたカウンセラーだ。二〇一九年には函館家庭生活カウンセラークラブ主催の講演会で函館に来たこともあり、いまは日本公認心理師協会の会長である。DV（ドメスティックバイオレンス・配偶者間の暴力）問題に詳しく、被害者だけでなく立ち直ろうとする加害者側の支援もしている。

この本の宣伝文には「家族と国家は、共に最大の政治集団である。DV、虐待、性犯罪。家族は以心伝心ではなく同床異夢の関係であり、暴力的な存在なのだ。イエは「国

家のミニチュア」に陥りやすい」とある。文中に「家族は無法地帯である」という衝撃的な一文もある。民法や刑法はもともと親からの体罰や夫婦喧嘩など家庭内の暴力を想定してないというのだ。たしかに子どもは親のもので、しつけといえば体罰が当然だった時代があった。七十年代に家庭内暴力が話題になるがそれは「子どもが親に暴力をふるうこと」で、父親が子どもや妻に暴力をふるうのは問題にはされてなかったのだ。児童虐待防止法ができたのは二〇〇〇年、DV防止法ができたのは二〇〇一年のことだ。

信田さんがユニークなのは虐待された人たちのカウンセリングを、「こころの問題」ではなく「家庭内の権力の問題、加害・被害の問題」として扱うようになったことだ。本人の話に共感するだけでなく、問題の解決まで支える。その人だけの問題ではなく、家族の関係を作り変えることにもなる。その第一歩は「おはよう」という挨拶からだという。挨拶と「私は〇〇してほしい」などと、私を主語して話すことによって相手との間に境界ができるのだそうだ。

家族みんな仲良くというのは理想かもしれないが、それが無理な家庭で暮らしている人も多い。私自身もボランティアの相談で「実は父親に虐待されました」という声を聞くことがある。家族とのさまざまな問題を抱えている人、その相談を聞く立場の人に、信田さよ子さんの本はおすすりめできる。

こんなとき私はどうしてきたか

中井久夫著

精神科医の中井久夫さんが八月八日に八十八歳で亡くなった。中井さんは統合失調症の研究や阪神・淡路大震災後の被災者のケアで知られている。専門の医学の研究書のほかにエッセイや外国の詩の翻訳など多方面にわたる本を書き、精神の病や日本文化に関心のあるたくさんの人に影響を与えた。

中井さんは軍人の家系に生まれ、戦時中だった小学生の時に英文のジェーン海軍年鑑を愛読していたという軍艦オタクだった。小学生時代ですでに日本の敗戦を予想していたという。運動が苦手で学校ではいじめられていたということで「いじめのある世界に生きる君たちへ」という著書もある。一般向けの本ではちくま学芸文庫に「中井久夫コレクション」全七冊が入っており買いやすいと思う。

もともと精神科というのは医師の権限がとて強いところで、医師が「加害のおそれがある」と判断すると患者を強制的に鍵のかかった部屋に入院させることができる。五十年前の札幌の病院では攻撃的な患者の脳を切除しておとなしくするロボトミー手術が行われたことがあった。ちなみに私が二〇一三年に精神保健福祉士になるための実習に入ったのはその後継の病院だ。ちよっと昔の精神科病院には精神障害者の人権を

守るといふより、危険な精神障害者から社会を守るといふことが期待されていたので、患者への人権侵害も多かった。

「先生」は偉い人になりがちで、そんな中で中井さんは、立場の弱い患者の側に立ち続けていた。精神科の医師や看護師に向けた講演をまとめた「こんなとき私はどうしてきたか」（医学書院刊）には「希望を処方する」「診断は宣告ではない」「協力を要請する」など統合失調症を発病して混乱した状態にいる患者を支えるための言葉がつまっていた、医療スタッフや家族にもおすすりできる。私も、たとえば就職についての相談で

「これは実験です。たとえうまくいかなかったとしても、この会社ではうまくいかなというデータを取ることに成功したことになります。」などと、中井さんのセリフを借りて使うことがある。

そして中井さんはいわば先生の先生とも言える存在になった。身近に話をよく聞いてくれる親切な精神科医がいたら中井久夫さんのファンかもしれない。

私が初めて中井さんの本を読んだのは、八十年代のはじめで「分裂病と人類」（東京大学出版会）だった。書店の外商部門にいたところに博物館に納品する本をめぐっていたら、面白そうなので、自分の分を注文して買った。読んでみて驚いたが、書かれていることが難しくてさっぱりわからない。わからないのだが、文章の断片がドキドキする

くらいに面白い。特に、人をものごとの兆候に感応する「分裂病親和者」（狩猟採集民的）とコツコツと努力する「執着気質者」（農耕牧畜民的）に分ける考え方は、当時、職場の人間関係で悩んでいた私の救いとなった。自分と他の人とは、人間のタイプが違わらしい。そうであるなら、無理せずに関わりを果たせばよいと思ったのだ。

それから二十年后にADHDについての本を読んだときに、ひらめきのネットワーカー型人間とコツコツ努力するツリー型人間という分類を知って、中井さんと同様の分類であることがわかった。私と同様に中井さん自身も「ひらめき型」で、世間とのズレを自覚してこの本を書いたようだ。

このブックガイドのために、中井さんの本を読み直したところ面白すぎて何冊も読んでしまっただけの結果、文章がなかなか書けなかった。たぶん、同じタイプの人にはとても危険な本でもあるのだと思います。

「感じるオープンダイアログ」森川すいめい著 講談社現代新書

税込 946円 ISBN 9784065233047

「まんが やってみたいくなるオープンダイアログ」

解説 斎藤環 まんが 水谷緑 医学書院 1980円税込

ISBN:9784260046770

この連載の隠れたテーマは「強制力（権力）に頼らないで他人を動かすことができるのか」である。「強制力」によって他人を動かすことは家庭から会社、国家間に至るまで普通に行われているのだが、場合によっては副作用があつて、ロシアでプーチン大統領が行っているのがその最悪のものだ。

今回とりあげるオープンダイアログというのは一九八〇年代にフィンランドのケロプダスという精神科病院で始められた「対話によるケアの方法」だ。この技法には病院だけでなく、家庭でも職場でも使える大事なことが入っていて、ビジネスに応用する本なども出ている。その病院の先生たちは精神を病んだ患者さんと、医師や看護師、心理士、家族などでチームを作り、定期的にミーティングを行って対話することを続け

ることで病気が良くなり、退院したり薬をやめたりできたという。

日本の精神科医では、森川すいめいさんやひきこもり問題で有名な斎藤環さんがオーブンダイアログを取り入れ、本も出している。森川さんの「感じるオーブンダイアログ」は考え方をわかりやすく書いていて新書なので入手もしやすい。同じ著者で医学書院から出た「オーブンダイアログ 私たちはこうしている」では実際に日本のクリニックでどのように実践しているかを書いている。また、斎藤環さんの「まんがやってみたくなるオーブンダイアログ」では、著者自身もまんがに登場して、対話を繰り返すことによつて患者だけでなく医師も変わっていく姿を描いている。お二人とも、オーブンダイアログは「治される方」だけでなく「治す側」にもよく効くと書いている。

オーブンダイアログには、まず「その人のいないところでの人の話をしない」「一対一で会わない」というルールがある。ミーティングでは患者さん本人や家族と医師や看護師、スタッフが立場を離れて、お互いを名前で呼び合つて話をする。その中には指示を出さない、強制をしない、批判をしない、結論を出さない、ただお互いの話を聞くということが続けていくのが大事なのだそうだ。簡単に思えるかもしれないが、病院で「先生、お父さん、お母さん」の代わりにみんな「さん付け」で話をするとしたら、役割社会の日本ではかなりの抵抗があるだろう。

「結論を出そうとしない」というのも大事な約束だ。途中で「リフレクティング」と

いう専門職だけで話をする時間をもつが、その間も本人や家族はその話を聞いている。専門職の側も、今まで話を聞いてどう思ったか、なるべく別な見方からの意見を出し合いい、同じ意見にまとまらないように努めるそうだ。毎回のミーティングであえて結論を求めず、中途半端な状態に耐えることで、次回までの間に事態が進展していく。

こういう対話を続けることで本人が回復していく。「偉い先生が患者を治してやる」という態度を捨てて、「ただ対等な立場での対話を続けていく」ことにすると治療成績が良いという結果になるのだという。「治そうとするのをやめたとき、一番良い治療になる！」という逆説である。

オープンダイアログが成立するためには、お互いに信頼できることが何より大事なのだろう。そして参加者が「ここでは何を話しても大丈夫」と思えるようになる場を作るためにはスタッフの熟練が必要になる。特別な薬も設備も使わない代わりに、手間と気づかいが必要になる。斎藤さんは、この方法は引きこもり当事者の支援にも効果があると書いている。斎藤さんは「人薬（ひとぐすり）」という言葉を提唱しているが、人によって傷ついた心は人によって癒されるということだろう。

私はボランティアで発達障害の相談会をやっているが、オープンダイアログの考え方が役に立ちそうなのでこういった本やオンラインの勉強会などで学んでいる。いろいろな現場で普及していくことを期待したい。

とても面白い本が出た。組合運動のベテランによる労働組合活動のハウツー本であり、非正規・貧困・格差・外国人労働者など日本の現実を描くノンフィクションであり、スカツとするお仕事エンタテインメント本でもある。

著者の鈴木さんは札幌地域労組という労働組合の専従職員である。日本では労働組合というと企業別の印象が強いが、地域労組は小さな会社の労働者が合同でつくった組合なので、さまざまな会社で働く人が参加し、職場ごとに支部をつくる。また、個人加盟もできる。実は私もこの管理職組合の元メンバーであり、著者は三十年来の知人ではあるが、仲間うちであることを割り引いてもすぐれた本であると断言する。

今は労働組合と言われてピンとこない人も多いだろう。学校では団結権、団体交渉権、団休行動権の労働三権については習うが、それがどのように役に立つかは教えてもらえない。従業員の見えるところに就業規則が置いてなかったり、あっても「うちの会社ではこうやっているから」などと違法なルールに従わされたりしている。

有給休暇がとれない、休憩時間に電話を取らなくてはならない、上司のパワハラがひどい、給料が最低賃金ギリギリで上がらない、職場で不正行為がまかりとおっている。労働組合はそういう、どこにでもある職場の問題を解決するために存在しているのだが、

最近はすっかり忘れられている。そんな中で、鈴木さんは地域労組の職員として「職場をよくしたい」という人たちと共に、労働組合を作って活動をしてきた。

この本は組合活動の手引書としては、とても実践的である。組合結成通知書、団交申入書、不当労働行為の警告書、争議行為の通告書まで「実際に使われたもの」をそのまま掲載している。そして、「腹をくくれば必ず成功する」、敵失としての「不当労働行為を楽しめ」「敵の中に味方をつくれ」と、アドバイスはあくまで現実的だ。また「電話の相談で相手の人柄が見えてくる」「職場でカラオケに誘ったら何人が集まるか?」「組合結成は復讐代行ではない」「無計画なストライキは組合崩壊につながる」など、失敗しがちな点もしっかり書かれている。

キーワードとして「腹をくくる」という言葉が何度も出てくる。おそらく「困難な条件の中で、自分の役割を自覚して必要な行動を行う」というような意味だろう。今の日本が、賃金・人権・経済成長・女性活躍などさまざまな点で諸外国に遅れを取っているのは「ジャーナリズム（道新は除く?）・政治家・労働組合」が「腹をくくれない」からだろうと私は考えている。批判すべき立場の人がきちんと批判しないとどんどん世の中が悪くなるのだ。

今年の二月、花畑牧場のベトナム人労働者が水道光熱費の倍額値上げに抗議してストライキを行ったが、会社はその後四人のリーダーたちに総額二百万円の損害賠償を求

めた問題があった。鈴木さんは言葉や習慣の違うベトナム人労働者を札幌地域労組に個人加盟させ、組合として交渉するなかで損害賠償を撤回させた。実は最初に労働者たちがストライキをやった時点では労働組合がまだなかった。鈴木さんはこう書いている。

「彼女たちが自らの労働条件の不当性に納得せず、異国の地でストライキに立ちあがったことに私はとても感動しました。同じ目に日本人が遭ったとしたら、諦めて泣き寝入りしていたかもしれませぬ。(略) しかしそもそもストライキは憲法や法律が先にあるのではなく、人類普遍の権利なのです。(略) 不当な扱いを受けたら抵抗のために立ちあがる。それは人間として当然のことです。」

和解文書の調印の際にはT社長が自ら出向いて潔く頭を下げたという。異例のことに感銘を受けた鈴木さんは、以後花畑牧場のチーズをよく買うようになったそうだ。

この本にはさまざまな事例が出てくるが、映画になりそうな話が満載であると思う。赤旗が出てくるので大手では難しいかもしれないが、独立系か配信なら問題ないだろうから映画化を期待したい。個人的には主役に佐藤二朗さんを推す。T社長の役は、ぜひご本人に登場願いたいものだ。